令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【静岡県】

目的・目標	● 高等学校内の特別支援学校高等部分校で行われるインクルーシブな学校運営や「交流及び共同学習」の全県的なカリキュラムの作成。 ● 現在実施されている「交流及び共同学習」と学校運営システムの検証と改善。 ● 両校が共に学んだインクルーシブ教育を卒業後の地域社会のインクルージョンに発展させる。

学校運営連携校	静岡県立沼津特別支援学校伊豆田方分校（対象：知的障害） 静岡県立田方農業高等学校	一体型	カリキュラム・マネージャー	元静岡県教育委員会特別支援教育課長

取組概要

現在、静岡県内の高等学校内に特別支援学校高等部分校（知的）が12校設置されており、「交流及び共同学習」を進めていますが、具体的対応はそれぞれの学校に委ねられています。

実施校の、田方農業高校に設置されたライフデザイン科のセラピーコースでは、科目「生物活用」の実験実習の一つの柱として、校内に併設する沼津特別支援学校伊豆田方分校生徒との学習活動を行っています。

本事業は、実施校の取り組み改善を基に、高等学校内の特別支援学校高等部分校で行われるインクルーシブな学校運営や「交流及び共同学習」の全県的なカリキュラムの作成し、実施校で行われている「交流及び共同学習」と学校運営システムの検証と改善を行う事を目的としています。

合わせて、実施両校が共に学んだインクルーシブ教育を卒業後の地域社会のインクルージョンに発展させるための体制、コミュニティースクールの在り方等も検討しています。

令和6年度の第2回運営協議会を田方農業高校と伊豆田方分校は、合同で開催し、本事業の趣旨を説明するとともに、意見交換をおこないました。

令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【静岡県】

①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

ライフデザイン科セラピーコースの2年生及び3年生生徒と、分校の作業学習の各班生徒との交流授業。分校の作業学習作業班は、園芸班、 陶芸班、清掃班、木工班の4班が編制されて、園芸についてはより専門的に学習している田方農業高校の生徒が、陶芸・清掃・木工については、作業学習で取り組んでいる分校の生徒が、それぞれ中心となって学習を展開しています。

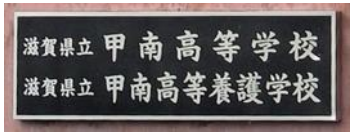
教育課程上、セラピーコースの生徒は農業科目「生物活用」、分校の生徒は「作業学習」の授業であり、学習内容や活動を分かりやすく説明することで、日ごろの学習の実践の場となっています。

本年度は、外部専門家の助言も踏まえて、「交流及び共同学習」としての活動が充分になされているか検証を行いました。

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

新たなインクルーシブな学校運営体制の在り方を検討するため、高校と高等養護学校の併置、校長及び教職員の兼務を実践している滋賀県を参考に研究を行いました。

静岡県には設置されていない高等特別支援学校の実践は、作業学習あるいは職業教科(専門科目)による指導など、特別支援学校高等部の教育課程の在り方を考える参考となりました。



田方農業高校・伊豆田方分校両校の学校運営協議会も加えて、地域でのインクルーシブ教育のあり方についての検討をスタートさせました。

令和6年度インクルーシブな学校運営モデル事業 取組概要 【静岡県】

本事業の成果	田方農業高等学校セラピーコースと伊豆田方分校の活動は、農高2年生の、園芸の知識・技術を特支（分校）の生徒に伝え、一緒に園芸活動と農高3年生の活動は立場を変えて、特支（分校）の生徒が、作業学習の内容を農高生に伝え、作業学習を体験する二つの取り組みがなされています。伊豆田方分校は、作業学習に位置づけ、共同学習の側面が強いことがわかりました。 特別活動や学校行事ではなく、互いの授業の中で「交流及び共同学習」を行っているため、活動の事前や事後に両校の担当同士で打ち合わせを行っている。そのことによって生徒の実情に即したグループ分け等、きめ細やかな配慮が可能となっていることがわかりました。 特に「交流及び共同学習」の仕組みを、生徒が「学んだ事を理解して、他者に伝える」とすることで、双方の授業にスムーズに組み入れることが出来ています。 これらの「交流及び共同学習」は、伊豆田方分校の開設時（平成21年）から専門科目の授業において相互交流を行っており、特支の作業学習と高校の実験実習の親和性もあり、インクルーシブの土壌が形成されている。その成果は、合同で行われる学校行事（体育祭・文化祭等）にも良い効果をもたらしています。
課題と今後の展望	ライフデザイン科セラピーコースと特支（分校）との活動に関しては、学習指導要領を踏まえた取組となっていますが、新たな視座で「交流及び共同学習」を捉えなおす必要があります。（交流から共同学習への移行、授業のねらい、評価等） 特支（分校）と農高各学科の活動は、「交流」が目的ではなく、相互に目指す生徒像を定め手段とする必要があります。 農業高校の特色として行われてきた「交流及び共同学習」を他の特別支援学校分校でも実施可能な普遍性のあるシステムにする必要があります。 新たなインクルーシブな学校運営体制の在り方を検討するため、高校と高等養護学校の併置、校長及び教職員の兼務を実践している、滋賀県を視察しました。本県には、設置されていない高等養護学校は、作業学習以外の科目を置く特別支援学校高等部の在り方の参考になりました。両校の学校運営協議会も加えて、地域でのインクルーシブ教育のあり方について検討します。 「交流及び共同学習」のための時間ではなく、高校の通常の授業に（単元単位で）特支（分校）の生徒が参加する方策について研究します。単発の「交流及び共同学習」に関しては、より良い目標達成のため構成的グループエンカウンターの手法導入を研究し、両校の「交流及び共同学習」の教育課程上の位置づけを明確にしていきます。